『グローカル天理』第 12 号掲載論文要旨

井上昭夫　「漢字御廃止之議」と「おふでさき」

日本語の歴史は漢字からの独立の歴史であった。その一例である前島 密の「漢字御廃止之議」（慶應2年）は、明治2年にはじまる「おふでさき」と、脱漢字という点で歴史的共時性を呈している。やまとことばは誌的表現向きで あるが、「おふでさき」は個々においては詩的であり、総体的には論理的であるという二つ一つの調和の上に成り立っている。

特別掲載：「おふでさき」とローマ字—梅棹講演「言語と文明」における井上所長あいさつ—

日本ローマ字会の会長である梅棹忠夫博士になぜ天理に来ていただく ことになったのか。梅棹先生の前に会長をしておられた斉藤強三先生の終戦後の天理での講演や、天理教教義翻訳研究会での「おふでさき」翻訳のとき以来ロー マ字会との御縁について解説する。斉藤先生は「「おふでさき」を読まないで、明治のことを言うな」と常々語っていたという。

特別掲載：梅棹忠夫講演「言語と文明—世界語としての日本語を考える」

2000 年 6 月に天理で開催された特別講演を一挙掲載。日本語の漢字による千年の呪縛、中国語のラテン化に触れ、さらにIT時代の日本文明の危機に話が及ぶ。ロー マ字論に対する反対論は文化論のレベルであり、「日本文明」の危機を救うのは英語ではなく、最高度の文明（科学・技術・経済）を語ることができ、国際語と もなりうる日本語のローマ字かしかない。

太田登・中井精一　「天理教原典とやまとことば（12）　奈良県方言資料1：『奈良県風俗誌』[1]」

原典ならびにやまと方言について研究するにあたり、重要と考えられる方言資料から大正４年（1915）、奈良県教育会によって企画され、県下市町村の小学校長を通じ実施された「奈良県風俗誌」について、その調査項目である39項目の詳細と、調査の概要について報告をおこなった。

佐藤浩司　「天理教東南アジア伝道誌（７）戦前のフィリピン伝道[5]」

北越支教会所属の高野馬治郎と、それに関わる保坂六郎治と小川孔一・ミネ夫妻のマニラにおける伝道について述べる。

金子昭　「天理経営学―その歴史・哲学・展望―（12）　思想編　宗教と経済・経営[6]」

出家修行を重んずるインドの原始仏教においては、もともと労働観と言うべきものは存在しなかった。大乗仏教において、在家信者と出家修行僧との聖俗区分を超える実践的な行為の教えが生まれた。それがいっそう本格的に花開くのは、中国で成立した禅仏教においてである。

小滝　透「天理比較神秘論への試み（12）人間と宗教[3]」

今回は、共同体の崩壊とそれに伴う私人の大量発生が、世界宗教発生の主因であることを述べてみた。次回は、こうして生まれた世界宗教と文明の関係、またそれ自身が内含する特徴と限界について述べてみる。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（12）協調と紐帯」

日本より一足早く近代国民国家への道を歩みはじめ西ヨーロッパ国々でも、円滑な集団行動といった行動様式自体、最初に国民軍を担った普通の民衆の運動習慣の中にはなかった。その意味で、どこの国でもそれは、訓練で身につける「技術」として教え込まれなければならなかった。

ウィリアム・マックニールというアメリカの歴史学者が、『Keeping Together in Time』という興味深い本を書いている。その中でかれは、協調して動くことのできた集団こそ、「人間」への進化の道を辿ることができたのだと述べている。

四万年以上前に遡る文化の成立は、人間の社会に三つの大きな帰結を もたらした。舞踊がもたらす意識変容の経験は、儀礼やさまざまな宗教的な心性の基盤になった。リズミカルな運動を通して、人間は、新しい段階の労働の形を 獲得した。踊りは、大きな集団内部に併存する小集団それぞれの中での連帯感を効果的に育んだ。

上杉武夫「都市の再生に向けて――アメリカ通信（12）民主主義とアメリカ社会」

アメリカ大統領選挙後、2週間にわたってゴア陣営による手作業によ る開票の要求、ブッシュ陣営による連邦裁への請願など様々なことが起こっている。これはアメリカにおける民主主義の理想と現実の違いを呈している。とはい え、国民がその結果に注目している現実を見ると、アメリ

カにおける民主主義はまだゆるぎなく健全であるようだ。今回のことは、来るべき世紀において、開か れた情報と教育が、政治と経済が調和するための鍵であることを我々に物語っている。

塩澤千秋　「脳死・臓器移植―カナダ通信（12）イスラム教と臓器移植」

イスラム教の臓器移植についての教義上の統一した見解はまだ見つからないが、律法に基づく現実の生活の中で判断を下している。脳死はイスラム教の死ではない。

小椋　博　「宗教・スポーツ・賭け（12）高校野球中継とスポーツの偶然性[1]」

高校野球のテレビ中継にも、視聴率をめぐって激烈な競争がある。視聴率を稼ぐため，ほとんどのスポーツ中継においてと同様,高校野球中継においてもゲームとしての本質が伝えられるよりも、スポーツ共同体に関するあらゆる言説が毎年、繰り 返し放送される。スポーツゲームの基本的要素であるノマド的・偶然的・賭けの性質は脇に置かれる。要するにゲーム展開に固有の「生成」の側面が弱いというべきであろう。